

榎垣外遺跡発掘調査報告書 (概 報)

平成 9 年度 榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査報告書



長野県岡谷市教育委員会

序

岡谷市は諏訪湖盆地の北西部にあって、湖北地区は鉢伏山、高ボッチを背景に横河川、塚間川が扇状地を形成しながら諏訪湖に注ぎます。諏訪湖西側は湖辺まで山塊が迫り、諏訪湖の出口である釜口水門から天竜川が流れ出ています。このような自然環境の岡谷には190箇所を越える遺跡があり、縄文時代をはじめ、弥生、古墳、奈良、平安時代など各時代にわたって多くの遺跡が存在することが知られております。

こうした歴史環境にあって、開発に伴う埋蔵文化財の調査は、毎年、多くの調査件数にのぼり、これまでに貴重な成果を記録にとどめ、あるいは出土品の保存に努めてまいりました。

さて、本年度の調査件数は20件を越え、多くの成果を得ることができました。ここに、平成9年度に実施した個人住宅等小規模開発に伴う試掘・確認発掘調査の概要をまとめ、「平成9年度榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査報告書(概報)」を刊行しました。埋蔵文化財の保護は土地所有者、事業者等の皆様の理解と協力により行われています。発掘調査で得られた成果を公開・活用することにより、これまで以上の理解と協力が得られるものと考え、今後この報告書が多くみなさまに活用されることを願っております。

最後になりましたが、今年度の調査にあたり、深いご理解とご協力を頂きました土地所有者と事業者の皆様に感謝申し上げます。また、発掘調査に携わっていただいた皆さんには炎暑、厳寒の中をご苦勞頂きお礼申し上げます。

平成10年3月

岡谷市教育委員会

教育長 北澤 和男

例 言

1. 本報告書は、平成9年度榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡試掘・確認発掘調査の報告書（概報）である。
2. 事業は国の平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金及び、県の平成9年度文化財保護事業補助金を受けた岡谷市教育委員会が実施した。
3. 調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成9年4月16日から平成10年3月19日にかけて実施した。整理作業は主に12月～3月に行ったが十分な整理が終了していないため概要の掲載にとどめてある。
4. 出土遺物、記録図面、写真などの資料は岡谷市教育委員会が保管している。
5. 本報告書中の原稿執筆は榎垣外遺跡・山道端地籍を小坂英文、榎垣外遺跡・十王堂地籍・下片間町地籍を笠原香里が行い、全体の編集・作図は事務局で行った。

目 次

序

例 言 目 次

1. 平成9年度試掘・確認発掘調査の概要	1
2. 榎垣外遺跡・山道端地籍	3
3. 榎垣外遺跡・十王堂地籍	9
4. 榎垣外遺跡・下片間町地籍	12

1. 平成9年度試掘・確認発掘調査の概要

本年度、岡谷市内において周知の遺跡内で農地転用などの開発行為が計画・実施され、市教育委員会が対応した件数は25件をこえた。このうち試掘・確認発掘調査は23件、14遺跡について調査を行った。

榎垣外遺跡では、これまでも官衙跡に多く見られる刀子や墨書土器、円面硯などが出土している山道端地籍で、平安時代の住居跡が6棟発見され、2×3間以上の掘立柱建物跡も確認された。特に住居跡から出土した丸軋や須恵器盤、緑釉陶器皿は律令制度による地方官衙遺跡の様子を解明するうえで貴重な発見となり、榎垣外遺跡が諏訪郡衙跡ではないかと推測される資料をさらに充実させることができた。

また、同遺跡十王堂地籍からは一辺10mをこえる奈良時代住居跡が発見された。カマドも他の発見例と比べると大型で、カマド内の支脚の上には、土師器甕の底部を伏せた状態で動かないよう、土師器の中に粘土を詰め込んで固定されていた。カマド自体も一度造り直されていることが判り、火床面が厚く焼けていることから、長期間にわたって使用されていたことが窺われる。今回の調査地点はこれまでに2×13間以上の長大な掘立柱建物跡を含め、定期的に掘立柱建物跡が配置された状態が確認されている地点に近いと、官衙跡との関係が注目される発見である。

同じく下片間町地籍では、平成元年に行われた発掘調査で4棟の掘立柱建物跡が重複して発見されており、今回の調査地にこの掘立柱建物跡の柱穴の並びが確認されることが予想された。遺構確認の結果、やはり前回の建物跡の柱穴と思われるピットが発見され、建物跡の大きさを確かなものにすることができた。このほかにも縄文時代住居跡や、平安時代住居跡が発見され、この辺り一帯は、さらに遺構密度の高くなることが確認できた。

調査期間	遺跡名	所在地	調査の原因	主な遺構	遺構・遺物の時代	
1	4.16	若宮	湊字藪久保4668-1	駐車場建設		縄文
2	4.16～5.23	榎垣外(山道端)	長地字山道端2337-1	駐車場建設	平住6・掘立柱1外	平安
3	4.17	能登舟	川岸中二丁目2625-1	住宅建設		平安
4	4.17	海戸	天竜町3-5310-1	住宅建設		縄文
5	4.23	阿原神田	堀ノ内一丁目9776-17	駐車場建設		弥生
6	5.9	五斗畑	川岸上四丁目1696-5	住宅建設		
7	5.21	出頭	川岸字出頭30番2外	住宅建設		縄文
8	5.29～6.16	榎垣外(十王堂)	長地字十王堂3608-1	宅地建設	奈良1	平安
9	5.29～6.16	榎垣外(十王堂)	長地字十王堂3608-3	共同住宅建設		平安
10	6.5	梨久保	長地字山の神4440-1	住宅建設		縄文
11	6.16～6.18	長塚	川岸西一丁目3903-1	住宅建設		縄文
12	7.23～8.5	東町田中	長地字田中街道下485-1外	住宅建設		弥生
13	7.24	長塚	川岸西一丁目3804-4	事務所建設	縄住1	縄文
14	7.30～8.1	東町田中	長地字田中街道下483-1	住宅建設		弥生
15	8.19～8.20	上向	字上ノ原95番1	共同住宅建設		縄文
16	9.4～9.5	榎垣外(林垣外)	長地東堀2307-2	住宅建設		
17	10.20～10.22	上垣外	川岸中二丁目2839-1外	住宅建設		縄文
18	10.23～10.28	上垣外	川岸中二丁目2830-1	住宅建設		
19	10.29～10.31	地獄沢	長地字夫婦石6106-2	通路拡幅		縄文
20	11.4～11.5	榎垣外(青木海戸)	長地字青木海戸3624-3外	物置建設		
21	11.6～12.20	榎垣外(下片間町)	長地字下片間町2374-1	駐車場建設	平住4・掘立柱2外	縄文・平安
22	11.6～11.14	榎垣外(榎海戸)	長地字榎海戸4010-1	住宅建設		
23	2.9～3.2	横道	本町一丁目5-12	駐車場及び工場建設	縄住1	
24	3.16～	西除入	川岸上四丁目1200-1	駐車場建設		縄文

第1表 平成9年度試掘・確認発掘調査一覧表



第1図 試掘・確認発掘調査地点 (番号は第1表の一覧表に同じ)

2. 榎垣外遺跡・山道端地籍

発掘調査の場所 岡谷市長地字山道端2337-1

発掘調査の期間 平成9年4月16日～5月23日

調査の原因 駐車場建設

調査面積 222.6m²

発見された遺構 平安時代住居跡6 掘立柱建物跡1

発見された遺物 緑釉陶器坏1 緑釉陶器皿1

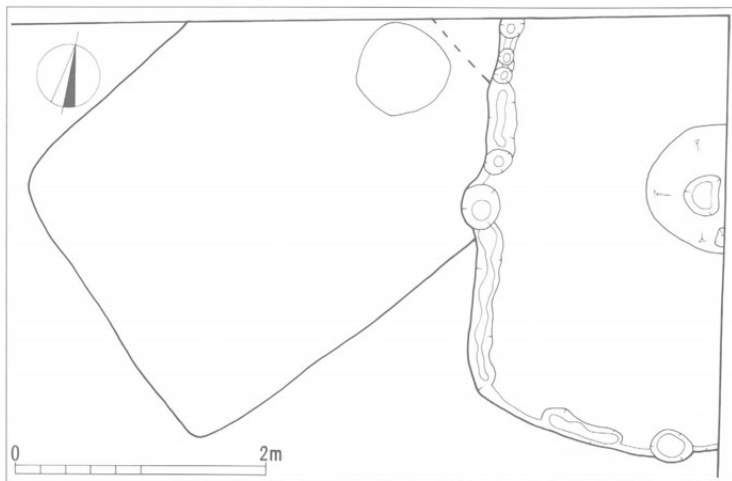
灰釉陶器坏2 灰釉陶器皿3 丸靱1

須恵器盤1 土器片・石片5箱

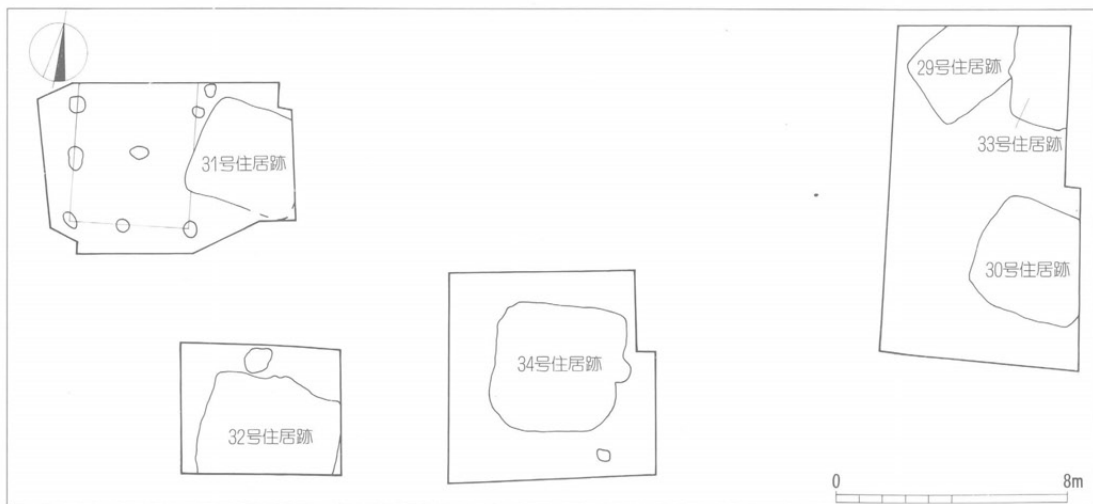


第2図 山道端地籍29・33号住居跡

榎垣外遺跡は縄文時代から平安時代の遺跡として知られているが、近年の発掘調査により遺跡の性格をより一層明確にとらえることができるように成りつつある。昭和57年、遺跡の北東に位置する長地中屋地籍の調査で多数の掘立柱建物跡群が発見された。以来周辺の個人住宅建設などの小



第3図 山道端地籍29・33号住居跡 (1:60)

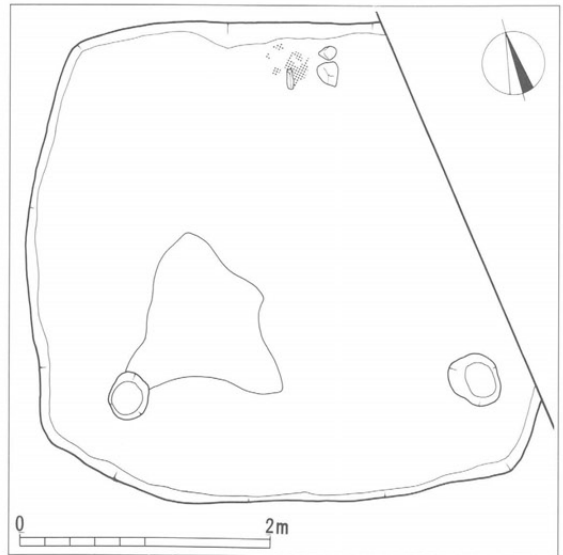


第4図 榎垣外遺跡山道端地籍遺構配置図 (1:260)

規模開発に伴う発掘調査を行ってきたが、これらの成果を併せると、長大な建物跡が規則制を持ちながら配置されていたことが徐々に明らかになってきている。また今回の調査地である山道端地籍などは遺跡の南西端に位置するが、昭和63年には一辺10mにも及ぶ大型住居内より円面硯や刀子、墨書土器が多数発見され、隣接する柿垣外地籍でも青銅製八花鏡、方鏡、鉄製海老錠が住居跡より発見されている。さらに、直線距離にして100mしか離れていない片間町地籍でも掘立柱建物跡群が発見されている。このように柿垣外遺跡は掘立柱建物跡群や、庶民の住宅とは思われないような出土遺物のある住居跡が発見されることから、官衙跡とその周辺に広がる街の跡ではないかと推測されている。

このように遺跡の性格を知るうえで、極めて重要な発見例の集中しているのが山道端地籍である。今回の調査は、駐車場敷地による整地のため樹木の抜き取りなどの掘削が行われることになり、遺跡の破壊が懸念されることから試掘確認調査を行った。

30号住居跡 住居跡は方位の南北よりやや東側に傾いた軸で、南北3.8m×東西4.0m、平面形は隅丸方形の住居跡である。掘り込みは5～10cmでそれほど深くはない。周溝は発見されず、壁柱穴もない。床は黄色砂礫層を掘り込んでいるため貼り床ではなく、全体に踏み固められた程度の堅さである。柱穴は2カ所発見され床面からの深さはそれぞれP1は16cm、P2は23cmと比較的浅い。P2の周辺は特に床面が堅く叩き締められている。カマドは北側の壁、ほぼ中央と思われる所に床面が焼けている箇所がある。袖石と思われる礫と若干の構築材が認められるが、カマドの形状を推測できるほどの残存はなく、焼土の厚さは1.5cmほどで厚くはない。



第5図 山道端地籍30号住居跡 (1:60)

31号住居跡 住居跡の軸は、やはり方位の南北よりやや東側に傾き、平面形は隅丸方形の住居跡である。壁は北壁17cm、西壁12cm、南壁11cmの掘り込みが残る。周溝は北側の壁下に幅25cm、長さ70cmの溝が確認されたが、他の壁下からは発見されていない。床面は全体に堅く踏み締められているが、特に堅く叩き締めたようすはない。ピットは4カ所発見されたが柱穴と思われるものは3カ所である。

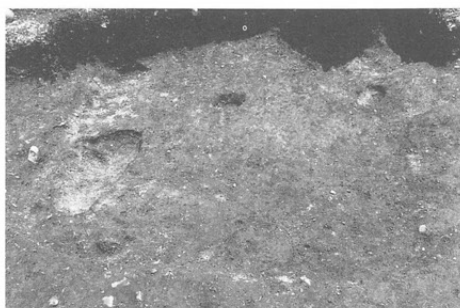


第6図 山道端地籍30号住居跡

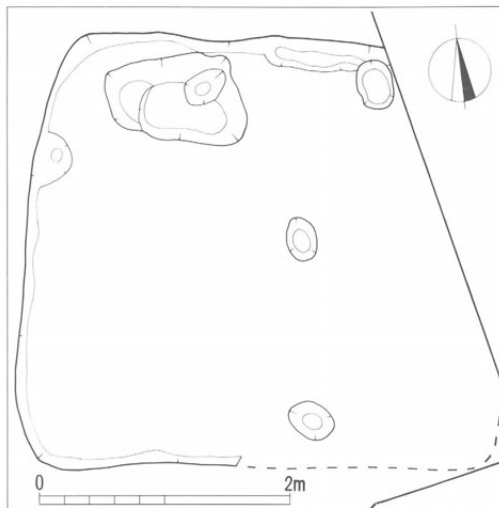
カマドは確認された壁には構築されていないため、調査区の外側に延びている東側の壁に構築されていると推定される。本址は掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の新旧関係は住居跡の方が後から造られている。

32号住居跡 住居跡の平面形は隅丸方形でやはり住居跡の軸がやや東に傾いている。壁は北壁が17cm、東壁7cm、西壁4cmを残し、確認できた3方の壁下には周溝が掘られている。深さは3~10cmと安定しないが、調査区外になる南壁にも周溝が巡ると推定される。周溝の中には直径10~20cmのピットが発見され、どの穴も深さは約20cmほどであることから、共通の目的で掘られた穴と推定される。住居の壁の崩落を防ぐための施設であろうか。床面は平らで良く踏み堅められている。カマド周辺から東側に特に堅く叩き締めてある。床面検出において発見されたピットは3カ所あるが、柱穴と考えられるのはP1、P2である。柱穴の位置が北壁に近いことから、本来4本柱であり、他の2本は調査区外に有るものと思われる。カマドは住居北壁の中央に構築されている。

カマドの袖石やそのほかの構築材は抜き去られており床面には袖石を埋め込んでいたと思われる凹みが確認された。火床面は床面より5cmほど低く掘り込まれている。焼土は比較的厚く、4cm焼けている。榎垣外遺跡から発見される平安時代住居跡のカマドは直線的に掘られた壁に構築材を押し当てて構築する方法が多いが、本址のカマドは北壁の中央をやや外に張り出させた位置にカマドを構築している。北壁の下に掘られ



第7図 山道端地籍31号住居跡



第8図 山道端地籍31号住居跡 (1:60)



第9図 山道端地籍32号住居跡 (1:60)

た周溝もカマドの張出部分で途切れそうな状態になる。

29・33号住居跡 33号住居跡は遺構のほとんどが調査区の外になるため住居跡の約1/4の面積しか調査することができなかった。平面形は隅丸方形と思われ、壁は西壁が10cm、南壁が10cmである。周溝は西壁下で幅20cm、深さ4cmだが、南壁下では幅15cm、深さ2cm、長さ60cmの短い溝が発見されただけであり、周溝は全ての壁下に巡るものではない。西壁下の周溝内には32号住居跡と同じくピットが発見されたが、穴の深さは3～5cmであり深くない。床は良く締まり、堅く明瞭に検出できた。住居跡中央部と思われるところに直径1m深さ35cmの摺鉢上の穴が発見されたが、何の目的で掘られたものか不明である。このほかには柱穴らしいピットは発見されず、屋内に柱穴を持たない理由と、この穴が関係するのであろうか。

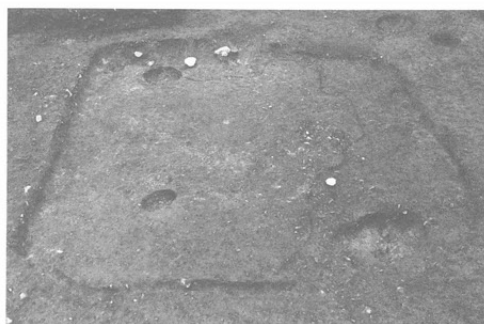
カマドは調査範囲内では発見されないため、調査区外にあると思われる。

29号住居跡は遺構確認のため耕作土層を掘り進めると若干の土師器坏破片等が出土した。またカマドの構築材とも思われる灰褐色の土や焼土粒子が散っている箇所がありカマドではないかと思われたが、火床面や袖石などは発見されなかった。また床面や柱穴も発見することができず、住居跡であると断言することはできない。

34号住居跡 本址は方位



第10図 山道端地籍32号住居跡

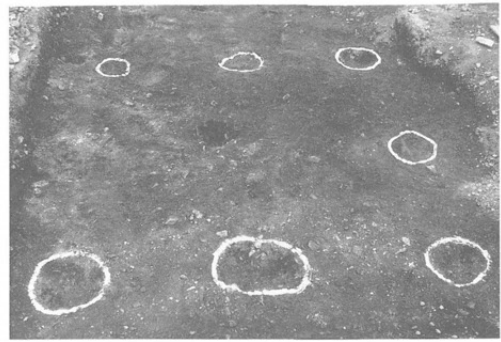


第11図 山道端地籍34号住居跡



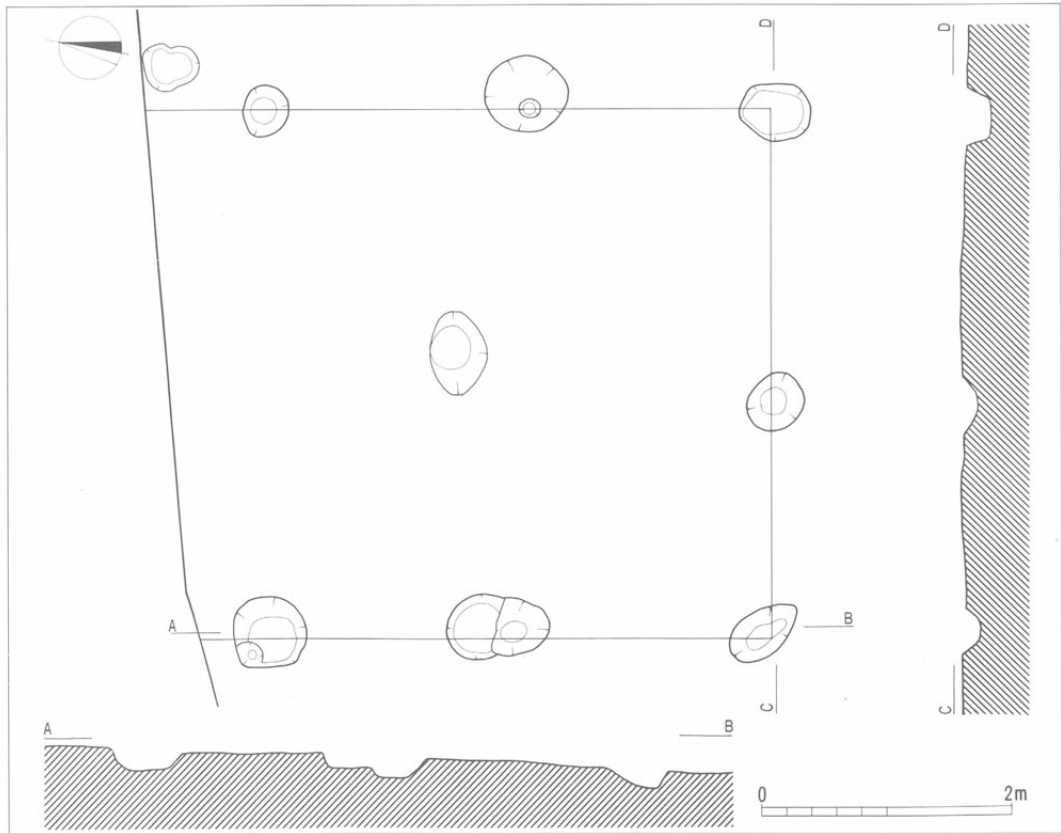
第12図 山道端地籍34号住居跡 (1:60)

の南北軸よりやや東側に傾き、平面形は隅丸方形である。壁は北壁20cm、西壁7cm、南壁7cm、東壁16cmである。周溝は西壁から北壁の途中までにつながる。床は北壁から住居中央よりやや南側まで広がり、カマドの焚き口から住居中央に貼り床された部分を確認できた。カマドは東壁中央に構築されているが、袖石などは抜き去られているため発見できない。火床面にはほとんど焼土は残っていない。



第13図 山道端地籍掘立柱建物跡

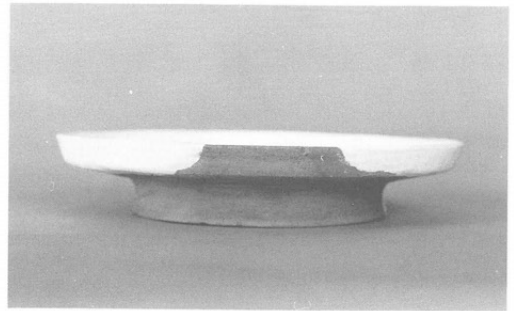
掘立柱建物跡 本址はほぼ南北に建てられた掘立柱建物跡である。2間×2間以上の建物跡と考えられる。柱穴の深さは遺構検出面が低いいため本来の掘り込みよりかなり浅い。



第14図 山道端地籍掘立柱建物跡 (1:60)



第15図 山道端地籍29号住居跡出土土師器



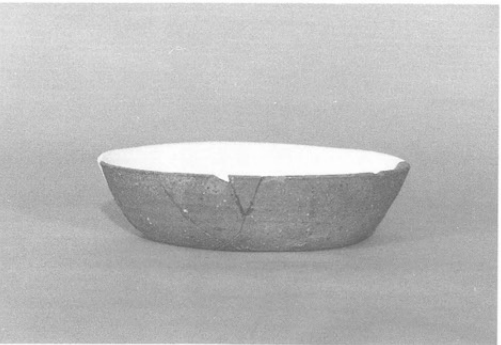
第16図 山道端地籍30号住居跡出土須恵器



第17図 山道端地籍31号住居跡出土遺物



第18図 山道端地籍32号住居跡出土土師器



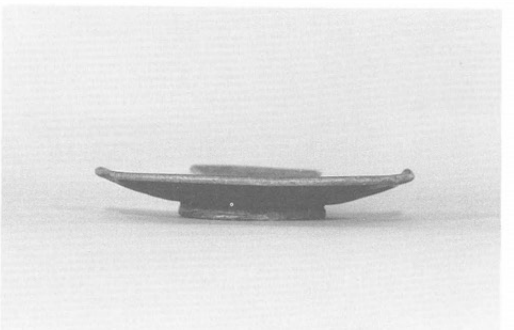
第19図 山道端地籍33号住居跡出土須恵器



第20図 山道端地籍34号住居跡出土灰釉陶器



第21図 山道端地籍34号住居跡出土土師器



第22図 山道端地籍34号住居跡出土緑釉陶器

3. 榎垣外遺跡・十王堂地籍

発掘調査の場所 岡谷市長地字十王堂3608-1

発掘調査の期間 平成9年5月29日～6月16日

調査の原因 宅地造成

調査面積 62.7m²

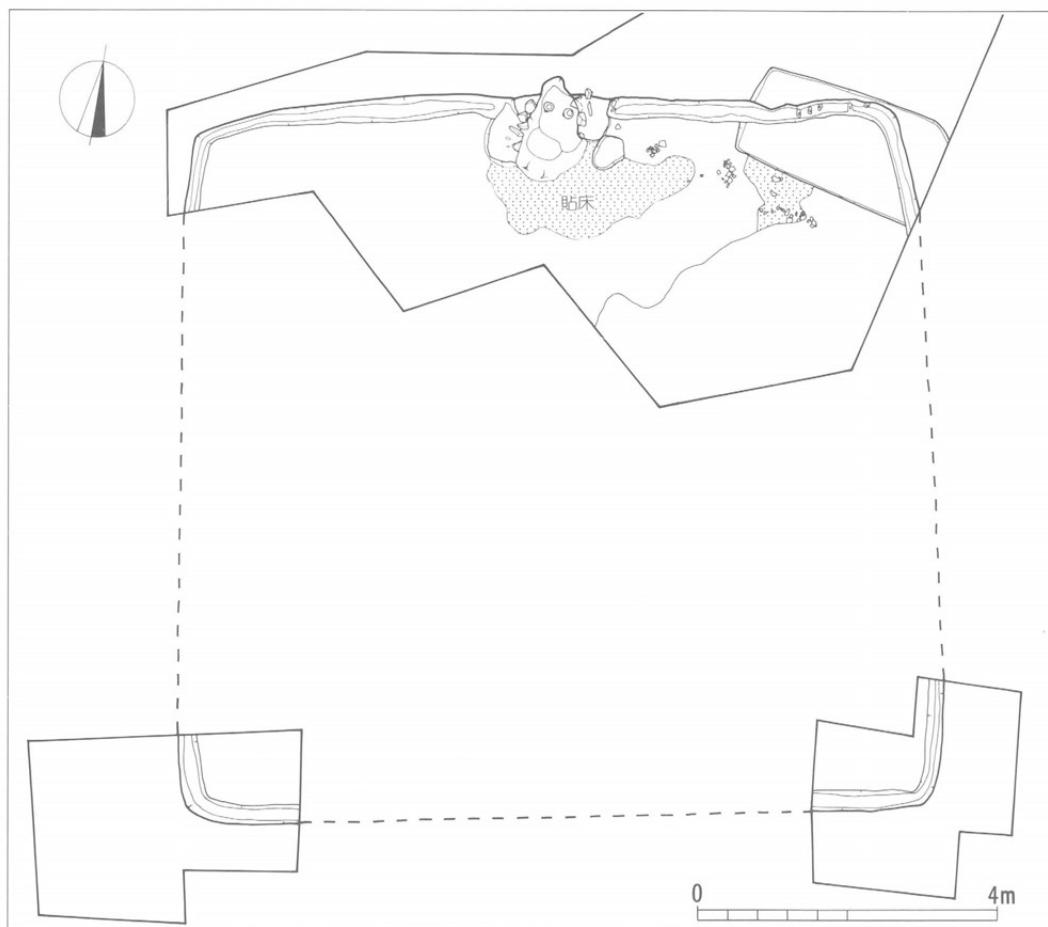
発見された遺構 奈良時代住居跡1棟 小竪穴1基

発見された遺物 須恵器坏3 須恵器坏蓋1 土師器甕3
刀子1 凹石1 土器片・石片4箱

今回の調査では、始めにトレンチを6カ所設定して掘り進めを行った。そのうち1カ所からは土師器破片が多数出土したため住居跡の覆土であることが予想され、トレンチの拡張



第23図 十王堂地籍1号住居跡



第24図 榎垣外遺跡十王堂地籍1号住居跡 (1:100)

を行ったところ、地表下約80cmの黄色砂礫層から住居跡の北側3分の1部分が検出された。住居跡の大きさを確認するため、北壁の長さから住居跡の南北の長さを推測し、新たに2カ所のトレンチを設定して調査した結果、南東コーナー・南西コーナーも発見された。

1号住居跡 遺構検出面から床面までの掘り込みは約10cmで、平面形は東西10.5m×南北10.2mの隅丸方形の大型の住居跡である。周溝は全体にめぐると思われ、幅16~32cm、床面からの深さ10~15cmである。出入口は確認できなかった。

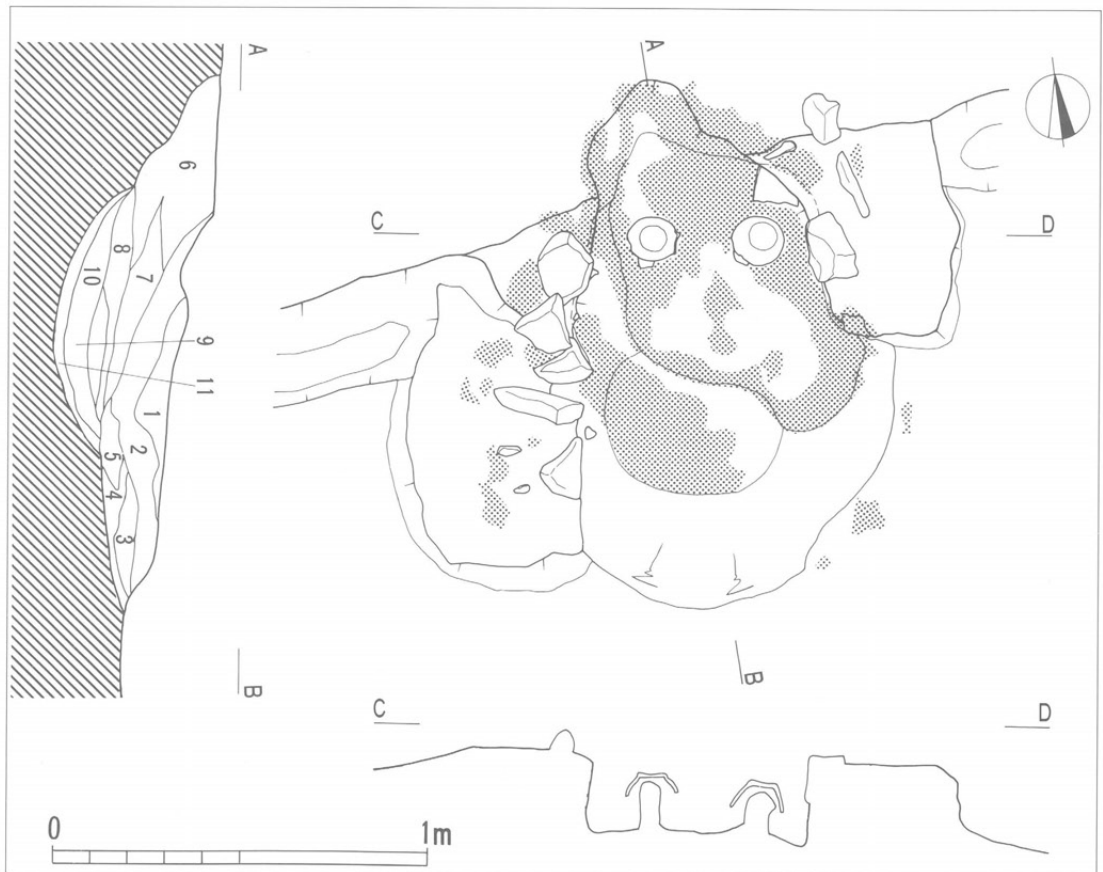
カマドは住居の北壁中央に位置している。天井は完全に崩落し、袖石は東袖に3個、西袖に6個残存していた。崩落した構築材を取り去ると、袖



第25図 十王堂地籍1号住居跡南東コーナー



第26図 十王堂地籍1号住居跡南西コーナー



第27図 榎垣外遺跡十王堂地籍1号住居跡カマド平面図 (1:20)

の端から端までのカマド幅は東西約150cmになり、住居の外に向って煙道に続く張り出し部分が確認された。火床面は赤くよく焼けていて、長期間使用されていたことがうかがわれる。焚き口から約45cm奥に入ったところに20cmの間隔で支脚石が東西に2本並べて据えられており、それぞれに土師器甕の底部を被せてあった。底部には粘土が詰めてあり、動かないようにしっかり固定してあった。火床面を掘り下げてセクションを観察すると、火床面から4～6cm続く焼土の下に焼けていない黄色土が約2cm間層としてあり、その下層に少し色の薄い焼土が約7cm続いていた。これは古い火床面の上に床を貼り、新しいカマドにつくりかえたものであると考えられる。

床は住居跡北側の西寄り3分の2ほどの範囲で確認された。カマド周辺は、カマドをつくりかえたときに床も貼り直したらしく、床が2枚になっていた。古い床は強く叩きしめてあり、新しい床は焼土混じりの構築材で1～2cmの厚さに貼床してある。住居跡北東コーナー付近にも構築材を叩き堅めてある部分があり、これを剥がすと約13cmの深さのピットが検出された。カマドのつくりかえの際に不要な穴を埋めたものと思われる。柱穴については、北東コーナーの内側約1.5mに、径約40cm、深さ約40cmのピットが検出された。柱穴とおもわれるが、その他の柱穴は不明である。遺物はカマド東側から集中して出土しており、土師器甕の破片がほとんどである。本址は出土遺物から8世紀前半期の住居跡と思われる。

小竪穴は住居跡北東コーナーを切る長方形の穴1基を検出したが、遺物がないため住居跡より新しい遺構であること以外詳細は不明である。



第28図 十王堂地籍1号住居跡カマド



第29図 十王堂地籍1号住居跡カマド



第30図 十王堂地籍1号住居跡カマドセクション

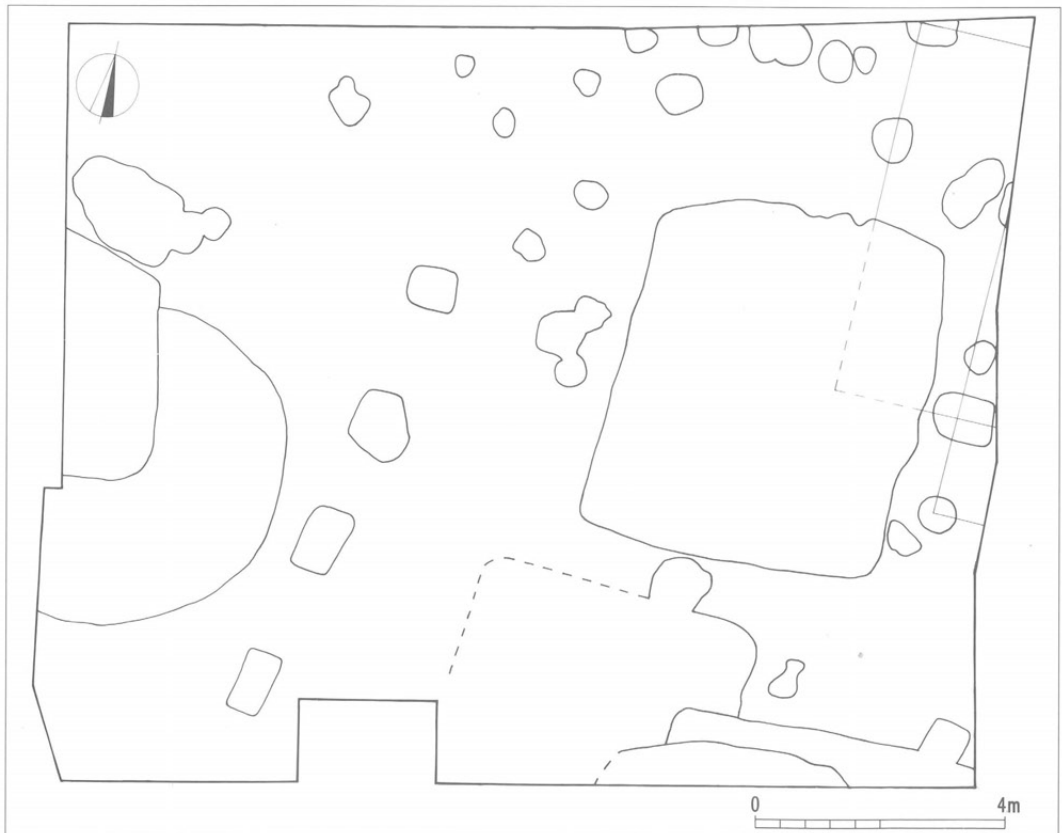
4. 榎垣外遺跡・下片間町地籍

発掘調査の場所 岡谷市長地字下片間町2374-1
発掘調査の期間 平成9年11月6日～12月20日
調査原因 駐車場建設
調査面積 170.0m²
発見された遺構 平安時代住居跡4
縄文時代住居跡2
掘立柱建物跡2



第31図 下片間町地籍遺構検出状態

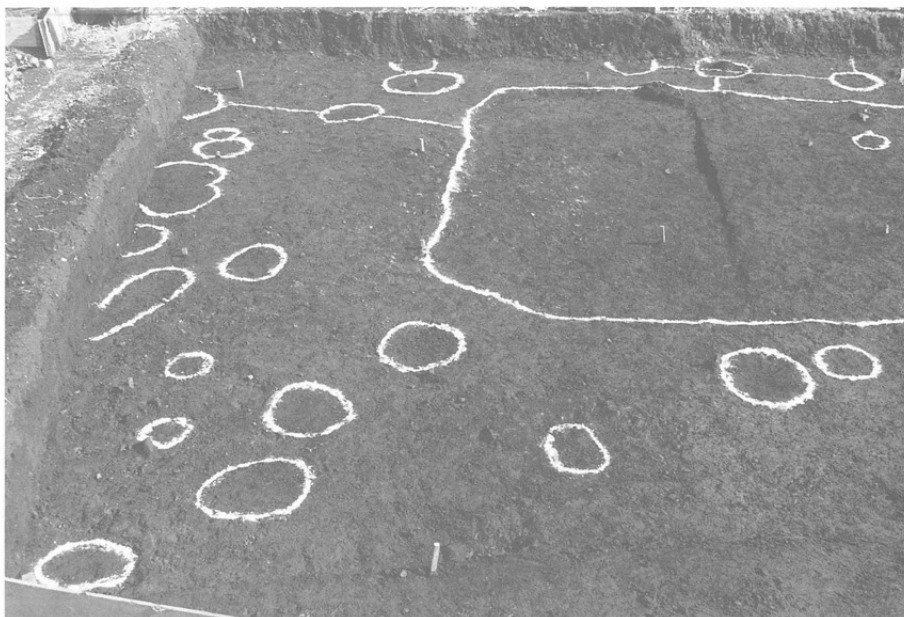
今回試掘調査を行った榎垣外遺跡下片間町地籍は、平成元年の調査で掘立柱建物跡群が発見された場所に隣接しており、全体の大きさが不明となっていた建物跡2棟の続きの発見が期待された。検出面は地表から約50cm下がったところで、形状から掘立柱建物跡の柱穴と推測される小竪穴が全部で10基が確認され、前回調査の図面と照らしあわせたところ、調査区東端から並んで発見された6基が未発見となっていた建物跡の柱穴



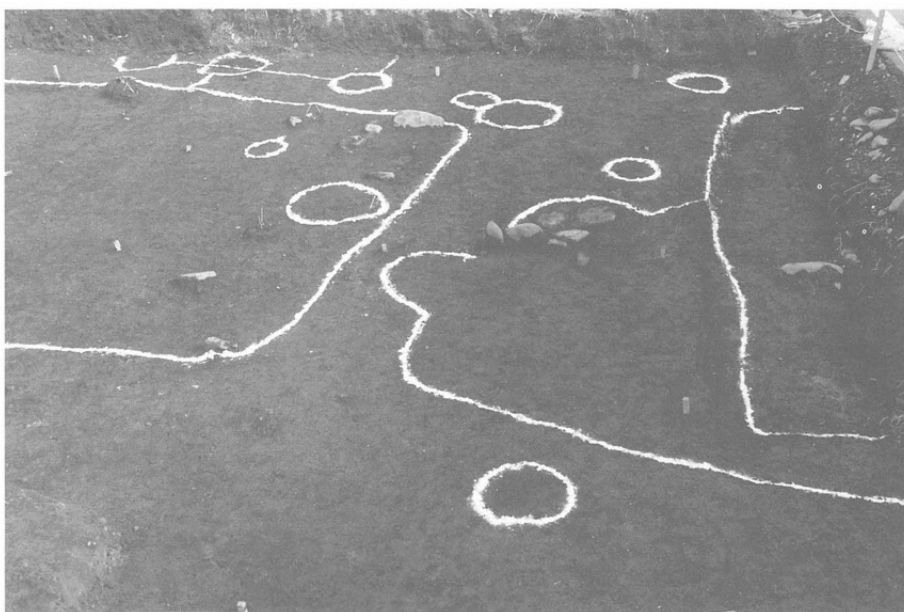
第32図 榎垣外遺跡下片間町地籍遺構検出状態全体図 (1:120)

であることが確認された。

その他の遺構に関しては、検出面での遺構の形状と上面出土の土器片から、縄文時代住居跡と平安時代住居跡であることがわかった。



第33図 下片間町地籍遺構検出状態（調査区北半分）



第34図 下片間町地籍遺構検出状態（調査区南半分）

報 告 書 抄 録

ふりがな	えのきがいと							
書名	榎垣外遺跡発掘調査報告書（概報）							
副書名	平成9年度 榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	長野県岡谷市教育委員会							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266-23-4811							
発行年月日	西暦 1998年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えのき がい と 榎垣外	ながの けん おか や し 長野県岡谷市 おさち あざ やまみちばた 長地字山道端	20204	133	36度 4分 29秒	138度 3分 46秒	19970416 ～ 19970523	222.6	駐車場建設
えのき がい と 榎垣外	おか や し おさち 岡谷市長地 あざじゆうおうどう 字十王堂	20204	136	36度 4分 41秒	138度 4分 28秒	19970529 ～ 19970616	62.7	宅地造成
えのき がい と 榎垣外	おか や し おさち 岡谷市長地 あざしもかた まちよう 字下片間町	20204	133	36度 4分 33秒	138度 3分 41秒	19971106 ～ 19971220	170.0	駐車場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
榎垣外	集落	平安	竪穴住居6棟 掘立柱建物跡1		緑釉陶器皿1、丸柄1			
榎垣外	集落	奈良	竪穴住居1		須恵器坏2			
榎垣外	集落	平安	竪穴住居6 掘立柱建物跡3					

